『とはずがたり』の「夢」

――作者と有明の月の交渉をめぐって――

国吉幸恵

はじめに

『とはずがたり』に虚構性が濃い事は、既に研究家諸氏によって指摘されている。[1] この問題は、今後、史実との照合や先行作品との影響関係・時代背景等を考え合わせ、多方面から吟味・検討していかなければならない重要な課題の一つである。本稿では、特に作者と有明の月の交渉について、「夢」という言葉を手がかりに、創作意識・構想の問題を探り、『とはずがたり』の虚構性を考える上での一資料としたい。

一

はじめに、『とはずがたり』以前の女流日記文学から幾つか用例を拾い、『とはずがたり』に至る「夢」の語の流れを概観しようと思う。[2]

先ず思い起こされるのは、「夢よりもはかなき世の中を、歎きわびつつ明かし暮らすほどに」という、『和泉式部日記』冒頭の一節である。ここでは、「夢」をはかないものの例として引き、「世の中」すなわち亡き為尊親王との恋を、その夢よりもっとはかないものであったと表現している。

森田兼吉氏の「夢よりもはかなき 女流日記文学と夢」にある通り、「人生と夢とを結びつけた比較的早いもの」[3]としては、『古今和歌集』巻第十六・哀傷歌に次の三首が見える。

藤原敏行朝臣の身まかりにける時に、よみてかの家に遣はしける　紀友則

寝ても見ゆ寝でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける

あひ知れりける人の身まかりにければよめる　紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世の中にうつつあるものと思ひけるかな

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる　壬生忠岑

寝るがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつつとは見ず

この三首において注目すべき事は、㈠親しい人の死を契機としている、㈡仏教思想の影響が見られる、㈢「夢」と「世」が「はかなし」という共通の性質で結び付けられている、等の点であろう。

『和泉式部日記』の「夢よりもはかなき世の中」という表現は、直接には為尊親王との恋愛を指しながら、背後に敦道親王との交渉をも重ね合わせ、二人の恋人の死を契機として生まれたものと見ることができる。こう考えれば、『和泉式部日記』の右の表現は、『古今集』の三首と㈠の点で共通し、しかもこれが重要な成立基盤となっていると言えよう。

次に『更級日記』から例を取ると、夫の死を契機として前半生を振り返り、過去に見た種々の夢を回想し総括する部分に、左の一文が見られる。

昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめで、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。

ここでは「はかなし」という形容詞を介さずに「夢」と「世」とが連結している。当面の問題は「夢」という言葉ではあるが、『更級日記』において、作者が実際に見た夢の内容を語るのに多く筆を費やしており、それらの夢が構想上きわめて重要である事、又、そうした夢の扱い故に、孝標女が『夜半の寝覚』や『浜松中納言物語』の作者に擬せられている事は忘れてはならないだろう。そうした事情を承認した上で、この『更級日記』における「夢の世」という表現には、㈠契機としての夫の死、㈡仏教信仰、㈢前半生を「『よしなき』、『はかなき』、『ゆくへなき』夢」[4]とする認識、すなわち先に『古今集』の三首に見られたと同様の要因が認められることに注意したい。

孝標女が「自己の生涯をかけて夢の世という認識とことばに到達した」[5]とするならば、鎌倉期に成立した『建礼門院右京大夫集』や『うたゝね』には、『古今集』以来の伝統を踏まえ、「夢」が人生のはかなさを象徴する語として定着した跡がうかがわれる。

『建礼門院右京大夫集』では、「夢」の語の「ほとんどの例がいわゆる下巻に集中する」[6]。しかも、寛永二十一年刊板本の上冊にあたる部分に見える三例の「夢」は、睡眠中に見るいわゆる「夢」を指すものであって、象徴的意味を担った語ではない。一方、いわゆる下巻は「寿永元暦などの頃の世のさわぎは、夢ともまぼろしとも、あはれともなにとも、すべてすべていふべききはにもなかりしかば」と始まり、続いてすぐ「いはむかたなき夢」という表現がある。「寿永元暦などの頃の世のさわぎ」

とは、言うまでもなく平家の都落ちから滅亡までを指すのであって、特に右京大夫にとっては資盛の死を意味するものである。つまり、この作品においても、人生を「夢」と表現する所には、愛する者の「死」が影を落としているのである。

この二例が、平家滅亡時の作者の体験を「夢」と総括したものであるとするならば、同じく『建礼門院右京大夫集』に見える「むかしの夢」や「さめやらぬ夢」といった例では、「夢」の指示内容が限定され、資盛との恋愛を意味する語として用いられている。

これと同様の例が『うたゝね』に見え、実ることのなかった恋を「憂き世の夢」と表現している。『うたゝね』には、「さすがに絶えぬ夢の心地は、ありしに変るけぢめもみえぬものから」という一節もあって、次田香澄氏によれば、この「夢の心地」は「恋の逢瀬」を意味する。後に述べる通り、『とはずがたり』では、「夢」が単独で逢瀬を表わす例が多く認められるが、いま述べた『右京大夫集』と『うたゝね』の例は、『とはずがたり』における、そのような隠喩としての「夢」の用法へ向かう過程と見ることができよう。『うたゝね』の「憂き世の夢」は、『とはずがたり』では、有明の月の言葉の中に見えている。

『うたゝね』においては、『古今集』の三首・『和泉式部日記』・『右京大夫集』に共通のモチーフであった「死」は認められないが、しかし仏教思想の影響は明らかである。例えば、先の「憂き世の夢」の前後は次のように記されている。

……経つと手に持ちたるばかりぞ、たのもしき友なりける。「世界不牢固」とあるところを、しゐて思ひつゞけてぞ、憂き世の夢もをのづから、思ひさますたよりなりける。

又、「仮の世の夢の中なるなげき」といった表現も見受けられる。

もう一つ、主題の面から先の女流日記との共通点を挙げると、『和泉式部日記』・『右京大夫集』・『うたゝね』ともに、短く激しくはかない恋を描いたものであり、殊に前の二作は恋人の不慮の死によって恋愛が断たれている。更に、『うたゝね』の場合注目されるのは、「うたゝね」の題号が、作中の「はかなしなみじかき夜半の草枕むすぶともなきうたゝねの夢」の歌に由来し、「この作品全体の内容を象徴するものとして作者が名づけた」（次田香澄氏）と考えられる事である。ここには、全篇を「うたゝねの夢」として構成しようとした作者の創作意識を認めることができる。

「夢」という言葉には、以上見てきたような流れがある。そうした先行作品と同様の趨向を『とはずがたり』の「夢」にも認め、その上で『とはずがたり』の作者固有の主張を「夢」の語に読みとろうとするのは、さしあたって当然の手順であろう。しかし、私はそれを一歩進めて、『とはずがたり』では、「夢」（特に作者と有明の月の交渉に関するもの）は伝統に即して作者の心情を表現した語であるばかりでなく、作品形成の積極的な方法として用いられていると考えるのである。すなわち、「夢」の語によって、作品世界は一つの主題のもとに構成され、同時に、伝統的に「夢」の語に伴うイメージが取り込まれることで、奥行きの深いものとなっているのである。

二

『とはずがたり』における「夢」の語は、「夢に夢見る」という表現を二と数えれば、七十二例に上る。これらを先ず二つの用法に大別し、該当する用例数を示すと、次のようになる。

㈠ 睡眠中に、現実のように種々の事物を見たり聞いたりする現象。又、睡眠中に見える像　40例

㈡ ㈠から派生した比喩表現　31例

（外に、「夢」の語を含む部分の文脈が乱れており、意味不明のものが一例ある。）

㈡は表現の内容によって、更に次の三つに分けることができる。[7]

A はかなさ・むなしさ　5例

B 男女の交渉・逢瀬　17例

C 異変・不慮の出来事　9例

このうち、Bは『とはずがたり』において比喩として用いられた「夢」の半数以上を占めている。

そこで、このBの「夢」を交渉のあった人物ごとにまとめてみると、次のようになる。

イ 作者と有明の月　7例

ロ 前斎宮と後深草院　4例

ハ 作者と近衛大殿　3例

ニ 作者と後深草院　2例

ホ ささがにの女と後深草院　1例

作者自身に関するもの（イ・ハ・ニ）は十二例を数えるが、このうち七例までが有明の月との関係で用いられたものであるのは注目される。『とはずがたり』によれば、作者が交渉を持った男性は、後深草院・雪の曙・有明の月・近衛大殿・亀山院の五人であるが、そのうち雪の曙と亀山院については、逢瀬を表わす「夢」の例は認めら

れない。亀山院と作者の関係については異論のあるところなので別にするとしても、雪の曙は作者にとって初恋の相手とも言える人であり、全巻を通じて登場するのに、この人との逢瀬を「夢」と言った例が全く見出せないというのは奇妙に思われる。同様に、作者と後深草院に関するものが、わずか二例というのも意外である。『とはずがたり』では、「夢」が逢瀬の隠喩として慣用的に用いられてはいるが、単に逢瀬一般を「夢」と表現したのではなく、作者が意識的に使い分けていたのではないかという疑問が起こる。

そこで、次に、作者と有明の月の交渉において用いられた「夢」のうち、その主要な用例を抜き出し、二人の関係を描くにあたって「夢」の果たす役割を通観してみたい。番号を○で囲んだものは、他の分類項目に属すと考えられる用例であるが、それ以外は「男女の交渉・逢瀬」（〔一〕－B－イ）を表わすと認められる例である。括弧内の数字は巻数とテキストの頁数を示している。

① 後白河院御八講の折、作者と有明の月の交渉の発端を描いた部分である。

思はずながら、不思議なりつる夢とや言はんなどおぼえてゐたるに……　（巻二・一〇三）

2 後深草院の病中、有明の月は延命供のために参仕、再度作者に言い寄る。

いとむつかしくて、薄様の元結のそばを破りて「夢」といふ文字を一つ書きて、参らするとしもなくて、うち置きて帰りぬ。　（巻二・一〇六）

3 2の作者の行為に対し、有明の月は次の歌で応じる。

榕摘む暁起きに袖濡れて見果てぬ夢の末ぞゆかしき　（巻二・一〇七）

4 同じ折、遂に作者が有明の月に屈し、最初の契りを結んだ直後に次の表現が見える。

見つる夢の名残もうつつともなき程なるに……　（巻二・一〇八）

⑤ 4に続いて密会を重ねた後、取り替えた小袖の褄に、有明の月の歌が付けられている。

うつつとも夢ともいまだ分きかねて悲しさ残る秋の夜の月　（巻二・一〇九）

6 後深草院に二人の関係を知られて後、勤行の合間を縫うあわただしい逢瀬の場面に、次のような表現が見える。

……見る夢のいまだ結びも果てぬに、「時なりぬ」とてひしめけば、後の障子より出でぬるも……　（巻三・一六二）

⑦ 6の後、局に戻った作者の述懐の部分に「夢」の語

が見える。睡眠中に見る普通の「夢」である。

……これや逃れぬ契りならんと、われながら先の世ゆかしき心地してうち臥したれども、又寝に見ゆる夢もなくて明け果てぬれば……　（巻三・一六二）

8　有明の月の第一子を懐妊した事を記す部分に、逢瀬を表わす「夢」の語が見える。

違はず、その月よりただならねば、疑ひ紛るべき事にしなきにつけては、見し夢の名残も今更心にかかるぞ、はかなき。　（巻三・一六六）

⑨　有明の月の突然の死に接し、悲嘆に暮れる場面に、「夢に夢見る」という「きわめてはかない気持を表す慣用句」（福田秀一氏）が用いられている。

……十一月二十五日にや、はかなくなり給ひぬと聞きしは、夢に夢見るよりもなほたどられ、すべて何と言ふべき方もなきぞ、われながら罪深き。　（巻三・一九二）

10　⑨に続く部分。3・⑤の場面が回想されている。

「見果てぬ夢」とかこち給ひし、「悲しさ残る」とありし面影よりうちはじめ、憂かりしままの別れなりせば、かくは物は思はざらましと思ふに……　（巻三・一九二）

11　有明の月供養のために東山に参籠する作者の夢に、有明の月が現われる場面である。

……聴聞所に袖片敷きてまどろみたる暁、ありしに変らぬ面影にて、「憂き世の夢は長き闇路ぞ」とて抱きつき給ふと見て……　（巻三・一九七）

以上十一例のうち、4・6・8の「夢」は、そのまま「逢瀬」と置き換えることのできるものである。11の例については、さきに『うたゝね』との関係で触れたが、「『とはずがたり』夢の分類」の

仏教の立場で「迷い」と同義に「夢」を用いる、……罪業という感がつよい。

という説明が適切であろう。2の例は非常に問題の多い所である。この「夢」は、直接には①の箇所、すなわち、有明の月がはじめて作者に思いを打ち明けた時のことを指すものと考えられるが、11の例と同様に仏教思想の影響を認め、作者が僧侶である有明の月をたしなめたものとも解釈できる。これに対し、有明の月は「見果てぬ夢の末ぞゆかしき」と応えるのであるが、このやりとりは、恋愛の発端を描く場面であるだけに、きわめて効果的であり、後の作品展開を考えると非常に暗示的でもある。結論を先に言えば、作者と有明の月との関係は、2で作者が有明に示した「夢」という言葉、この一語に集約されると言ってもよい。実際、作者と有明の月の交渉を描

いた部分を追って行くと、二人の関係を「夢」と見なす作者の一貫した姿勢が浮かび上がってくるのである。

三

作者と有明の月の交渉は、先に「夢」の用例①として挙げた後白河院御八講の時に始まるのであるが、「有明の月」の仮称で呼ばれる人物は、これより早く巻一に登場している。「有明の月」を実在の誰と見るかは、いまだに論議のあるところで、宮内三二郎氏などは法助法親王説を唱えられた[8]が、現在のところ、性助法親王説が有力であり、ここでも後者に拠ることとする。この立場では、巻一のはじめの部分に記された東二条院御産の場面に登場する「大御室」もまた、仁和寺後中御室であった性助法親王すなわち「有明の月」と考えられるのである[9]。しかし、本稿で問題とするのは、『とはずがたり』に描かれた「有明の月」と呼ばれる高貴な僧と作者との恋の物語である。しかも、その男主人公である「有明の月」は、性助法親王における仁和寺後中御室としての社会性を切り捨てたところで描かれている。従って、ここでは右の事情を承認した上で、有明の月の登場を、巻二・後白河院御八講の時としたい。

次に、二人の交渉を描いた世界（宮内論文の言う「第二主題」[10]）の終結をどこと見るかであるが、『とはずがたり』中の現実世界での二人の交渉は、有明の死によって終わっても、「夢」の用例11に挙げた通り、夢の中で二人は最後の逢瀬を遂げている。この後、作者が有明の第二子を出産した所までとしたい。

『とはずがたり』の世界は時間の流れに沿って進行しているので、右の両時点に挟まれた部分においても、作者と有明の月の交渉は断続的に叙述され、その間に他の様々な話が織り込まれている。しかし、その中で、二人の交渉はやはり大きな主題の一つとして捉えることができ、これは多分に物語的性格を有しているのである。

一つには、予告としての伏線、その展開、そして実現という叙述方法が挙げられる。後深草院の見た「五鈷の夢」は、その後の院・作者・有明の月の関係や、作者の懐妊、生まれた子供の処置を暗示する内容であるし、有明の見た「鴛鴦の夢」も、作者の第二子懐妊と、有明の死という形で実現している。有明の起請文中に見える「われ定めて悪道に堕つべし」という条は、同じく有明の「憂き世の夢は長き闇路ぞ」という言葉と照応するものである。

又、先行文学の枠組みを借りて、物語的世界の構築を意図した跡もうかがえる。柿本僧正と染殿后にまつわる伝承や、志賀寺の聖と京極御息所の説話を取り入れてい

るのが、それである。もっとも、『とはずがたり』では各説話間で登場人物が錯綜している。

内容面では、有明の月の第二子懐妊の時期が、第一子出産直後の事として語られていて、事実とは認め難い事などが挙げられる。これは、事実の朧化を意図して、作中の年時を実際の事件年時とずらして書いていくという手法が、他の主題における同様の叙述方法と衝突して破綻を来たしたものと説明される。しかし、その事によって作品世界は少しも破綻を生じてはおらず、むしろ、二人の恋の幕切れにふさわしい劇的要素が加味されたという印象を受ける。そこには、常識の枠を超えた世界を容認させる創作の魔術が働いているのである。

以上の点に加えて、本作中、作者と有明の月の交渉を描いた話が、他の主題とともに断続的に叙述されていながら、有機的結合の強いものとなっているのには、各所に用いられた「夢」の語が大きく作用している。作者は先ず、二人の出会いを「不思議なりつる夢とや言はん」（例①）と記している。次に、作者が有明から手紙の返事を強要されて示したのが「夢」の一文字（例2）である。これに対し、有明が「ゆかしき」と言った「見果てぬ夢の末」（例3）、すなわち二人の恋の行方は、例4・6・8などの逢瀬を重ねた後、「憂き世の夢は長き闇路ぞ」（例11）という、作者の夢に現われた有明自身の言葉で示される。このように、離れた段の各々が、「夢」の語によって相互に呼応し連続しているのである。殊に、例2の「夢」は例3の「見果てぬ夢の末ぞゆかしき」の句を挟んで、例11の「憂き世の夢……」と見事に照応している。作者と有明の月の交渉は、このような、いわば「夢」の連環によって、表現し尽されていると言えるのではないだろうか。

このように考えてくると、作者は本作執筆にあたって、有明の月との恋を主題とする世界を、それ自体独立して一個の作品となり得るような形に、あらかじめ組み立て、これを分解して、他の事件の展開と合わせて配置したのではないかと考えられるのである。構想の主軸となっているのが「夢」であり、こうした設定の背後には、作者が、有明の月との交渉の中に、「夢」と表現するにふさわしい要因を認めていたことが知られる。

四

作者と有明の月の交渉は、短く激しくはかない恋であった点で、『和泉式部日記』・『建礼門院右京大夫集』・『うたゝね』の場合と共通する。特に、恋人の突然の死による幕切れは、前の二作と類似するものである。雪

の曙や後深草院と違い、有明の月は突然作者の前に現われ、一挙に燃え上がって瞬く間に逝ってしまった。有明の月にとっても、思い残す事の多い恋であったはずである。二人の交渉のこうした側面をとらえ、作者はこれを「夢」と表現したのであろう。

2 ㋔ 次に考えられるのは、有明の死が作者に与えた衝撃である。愛する者の死を契機として、人生と「夢」が結び付く事は、既に見てきた通りである。有明の月の死に接し茫然とする様を、作者は「夢に夢見るよりもなほたどられ、すべて何と言ふべき方もなき」（例⑨）と表現し、有明の最後の手紙を携えて来た稚児との対面についても、「夢の心地して……げに筆の海にも渡りがたく、詞にも余る心地し侍る」と記している。『建礼門院右京大夫集』のいわゆる下巻の冒頭や、死を覚悟した資盛を前にして返す言葉もなく、遂に平家の都落ちが現実のものとなった時の、「涙のほかは、言の葉もなかりしを、つひに秋の初めつかたの、夢のうちの夢を聞きし心ち、なにかはたとへむ」といった部分と、きわめて近い表現と言える。

3 ㋕ 第三に、仏教思想を背景とする罪の意識が考えられる。作者にとって、この恋愛は最初から「思ひの外なる事」であり、死を予感した有明の言葉に対しても、「由なき妄念」という表現が用いられている。こうした見方は、二人の交渉に対する作者の基本的姿勢であると言えよう。それが、例⑦に見えるように、「これや逃れぬ契りならむ」という認識に至ったのには、二つの要因が考えられる。一つは、いわゆる女楽事件と伏見の事件によって作者の周囲の状況が変化し、作者が孤立無援の状態に追い込まれた事である。今一つは、二人の関係が後深草院によって公認された事であり、これによって作者の「心の鬼」すなわち良心の呵責が軽減した訳ではないが、一応の大義名分が与えられたことになり、作者にとって、有明との関係を正当化する大きな材料になったと考えられる。

「逃れぬ契り」という認識は、この後改めて確認されるが、これは「見し夢の名残」としての作者の懐妊が明らかになった事を踏まえていると見るべきであろう。同時に、「男女の事こそ罪なき事に侍れ」とする後深草院の宿世観も、二人の交渉を余儀ないものとする作者の判断を裏付けていると言える。後深草院のこうした見方は、作中に繰り返し語られているが、これは一種の方便でしかなく、その裏には、やはり罪の意識が看取されるのである。後深草院の会話中に有明の月の言葉が引用され、作者との結び付きを「悪縁」と言った箇所が見えるが、

二人の関係は、やはり「悪縁」と呼ぶべきものであったと見られる。

有明の死の場面（例⑲）には「われながら罪深き」という表現が見え、ここに至って、作者は有明の「妄執」を自分自身に関わるものとして捉える立場に立つ。二人の関係は、僧である有明の月にとっては勿論、作者自身においても、愛執の罪と見なされるものだったのである。例11に引いた「憂き世の夢は長き闇路ぞ」という有明の言葉は、二人の交渉を「夢」すなわち罪と認め、その罪によって死後も救われないという事を言ったものと考えられる。

更に、二人の関係を「夢」と表現するところには、作者の自己正当化の態度を認めることができる。この恋愛の意味するものは、作者と有明の月とでは、まったく異なる。有明にとっては破戒行為であり、その生涯中唯一無二のものであったのに対し、作者にとって有明は複数の男性中の一人であった。そうした事情を反映して、作者自身、自己の心理の変化を、恋愛の一般的な展開として捉えた箇所が作中に見受けられる。又、有明死後の後深草院の態度に対し、「わが咎ならぬ誤りも、度重なれば、御ことわりにおぼえて」と表現する所から、作者が有明との交渉を近衛大殿や亀山院の場合と同一線上に置き、すべて「わが咎ならぬ誤り」と捉えていた事が知られる。

二人の結び付きは、直接的には有明の月の「由なき妄念」、間接的には、作者の置かれた孤独な立場と後深草院の公認によるものであることを作者は強調する。このように、作者は自己弁明を繰り返し、自己の行為を正当化しようとしているのである。有明の月との交渉を「うつつ」ならぬ「夢」とするのは、その現われと見ることができる。

おわりに

このように、作者と有明の月の恋の物語は、「夢」をめぐる二人の応酬を描いた発端と、クライマックスとも言うべき東山での暁の場面とが呼応し、「夢」の連環によって、『とはずがたり』中に一個の独立した作品世界を形成している。こうなれば、そこに『うたゝね』における同様の創作意識を認め、巻二で提示される「夢」の一文字を主題とする世界を作者が描き上げようとしたと考えることが可能なのではないだろうか。

なお、『とはずがたり』におけるこのような作品世界形成の方法は、「夢」の語の表現内容の歴史的な推移と無関係ではないと思われるが、この点については改めて

検討したい。

〔注〕

（1）松本寧至『とはずがたりの研究』（昭和四十六年四月、桜楓社刊）、福田秀一『中世文学論考』（昭和五十年五月、明治書院刊）等。

（2）本稿における本文の引用は以下の書により、「夢」の語には傍線を付した。

小沢正夫校注・訳『古今和歌集』（日本古典文学全集七、昭和四十六年四月、小学館刊）。

藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（日本古典文学全集十八、昭和四十六年六月、小学館刊）。

糸賀きみ江校注『建礼門院右京大夫集』（新潮日本古典集成、昭和五十四年七月、新潮社刊）。

次田香澄・渡辺静子校注『うたゝね・竹むきが記』（昭和五十年六月、笠間書院刊）。

福田秀一校注『とはずがたり』（新潮日本古典集成、昭和五十三年九月、新潮社刊）。

（3）森田兼吉「夢よりもはかなき女流日記文学と夢」（佐藤泰正編『文学における夢』所収、昭和五十三年四月、笠間書院刊）。

（4）関根慶子「更級日記における阿弥陀仏の夢をめぐって」（梅光女学院大学『日本文学研究』第十三号、昭和五十二年十一月）。

（5）前掲論文（3）。

（6）横井孝「右京大夫の『夢』―ある作品論の試み―」（『駒沢国文』第十六号、昭和五十四年三月）。

（7）駒沢大学国文学会中世文学研究部会「『とはずがたり』夢の分類」（同会『研究部会年報』第四号、昭和四十四年七月）では、「現実事象の比喩（「夢」ということば）」という分類項目を掲げ、これを「空虚」・「煩悩・愛欲」・「衝撃」の三つに分けている。

（8）宮内三二郎『とはずがたり・徒然草・増鏡新見』（昭和五十二年八月、明治書院刊）第一篇第三章。

（9）冨倉徳次郎訳『とはずがたり』（筑摩叢書、昭和四十四年六月、筑摩書房刊）補注四〇五頁参照。

（10）前掲書（8）第一篇第一章一九頁において、宮内氏は次のように述べておられる。

作者は、巻二と巻三においては、展開さすべき主・副二つの主題を持っていた。第一主題は、すでに巻一からはじまっている後深草院と自分との関係を中心とする院御所における生活経験であり、第二主題は巻二からはじまる「有明の月」と自分との関係の経緯である。

（岡山大学大学院文学研究科）